
MUV-LUV ALTERMATIVE チートな転生者

ジェナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M U V－L U V A L T E R M A T I V E チートな転生者

【Nコード】

N 1 3 1 8 U

【作者名】

ジェナス

【あらすじ】

マブラヴの小説を読んだ主人公がチート能力を貰ってマブラヴオルタの世界へ行っているという頑張る物語です。

ただしかなりご都合主義&無理がある設定独自解釈が酷いですこういうものが嫌いな方はそのまま戻るボタンを押してください。

プロローグ 新たな出会い（前書き）

今回はプロローグです。

プロローグ 新たな出会い

やあ皆、俺は上条遊星だよ。え？なんでいきなり自己紹介をしてるかって？それはね、

人生って何があるか分からないよね。自分じゃどうしようもない事ってホントあるよね。

俺さ、ついさっきまで家で小説とその小説のスピンオフ作品を読んでいたんだよ。でさ、この小説もともとPCゲームだったから友達に借りようと思って

ケータイを取ろうとして椅子から落ちて目を開けたら、なんか分からないところにいたんだよ。

しかも、目の前にはなぜか土下座をした美女がいたんだよ。

遊「え〜つとあなた誰ですか？」

一応声をかけてみた。

美「すいませんでした！あなたは死ぬ予定ではなかったのに殺してしまいました。」

なんかスッゴイ勢いで謝られたんだけど、へ？俺死んだ？たしか俺は家で小説読んでたよな？

そして、感動して友達に連絡しようとしたら椅子から落ちて、つまさか！！

遊「もしかして俺の死因って椅子から落ちた事？」

美「はいそうです。」

マジで？俺そんな死に方したの？予定外だったらなんか隕石が直撃したとかトラックが突っ込んできたとか心臓発作じゃないの？俺が読んできた二次創作物の主人公の死に方じゃないの？

遊「あれ？ちょっと待てよ。俺って予定外で死んだんだよね。で、しかもこの状況ってまさか！あなたは！」

美「はい。私は戦いの女神アテネです。あと、あなたは転生できません。あなたが好きなアニメやゲームの世界に。」

うん、完全なテンプレじゃん。

遊「なら、魔法少女リリ「それはダメなのよ。」え？なんで？」

ア「うちの娘がなんかワイヤー振り回したら寿命の帯切っちゃってすでに3人もその世界に行っちゃってるのよ。」

何やってんだよその娘。なら何処に行こうかな？

ア「さっきまであなたが読んでいた小説の世界はどうなの？」

あの死亡フラグ満載の世界か。俺生き残る自信ないよ。

ア「大丈夫よ。ちゃんと特典はつけるから。」

遊「それなら、多分生き残れるな。で、その特典って俺が選べるの？」

ア「ええ、そうよ。何がいい？」

遊「えっとまず完全なツインドライブシステムを積んだダブルオーガンダムセブンソード／Gと、太陽炉製作の為の知識
更にその世界の戦術機の出るとか開発が出来るとか俺の体力や運動神経とか空間把握能力を最強に後俺をイノベーターにしてくれ。」

ア「あなた、オルタネイティブ計画潰す気？」

遊「いくらイノベーターといっても元々は人間だ。あいつ等にとっては何も変わらないだろ。」

ア「大丈夫かしらそれで？」

遊「多分、大丈夫だろ。それにあいつ等は死なせたくないし。」

ア「ちなみにあなたが行くのはオルタの世界に限りなく近い平行世界だから。」

後、あなたの体火葬されちゃってるから新しいものにしないといけないけどどうする？」

遊「分かった。そのままの世界だろうと平行世界だろうと原作ブレイクはするつもりだったから関係ないけどね。」

後、体は刹那・F・セイエイを日本人っぽくしたかんじで。」

ア「分かったわ。後はもう何も無い？」

遊「ああ特には無いな。」

ア「そう、なら御武運を。一応私、戦略の神様だから何かしらのご利益はあると思うわよ。」

遊「自分で言うなよ。」

ア「それじゃ頑張ってね。」

すると、俺は光に包まれた。

プロローグ 新たな出会い（後書き）

第一話はこの後投稿します。

第一話新たな世界（前書き）

第一話です。

はあ、どうやっても駄文にしかない。

第一話新たな世界

遊星Side

俺は今太平洋上をダブルオーに乗ってモニターでスペックを確認しながら飛んでいた。

説明によるとコイツは光学迷彩が展開可能らしい。

そのほかにもいろいろとこいつのPCの中にはいろいろなデータがあるらしい。すこし無茶苦茶なところもあるがコレでいいだろう。

？「マモナクモクヒョウチテン、モクヒョウチテン！」

俺がスペックを確認しているとモニターの隣に設置されているハロが俺に教えてくれた。

ちなみに今日は1999年8月5日、そうだった今横浜では明星作戦が行われている。

遊「ハロ、光学迷彩展開！このまま横浜へ飛翔する！」

そして俺はダブルオーの速度を上げた。

??? Side

今、そこではある部隊がBETAに対し奮戦していた。しかし、最早部隊は残り3機しかない。

？「ホワイトファング1よりHQ支援砲撃を要請する！」

彼女はこの部隊の隊長篁唯依だ。彼女はH Qへ支援砲撃の要請をする。

H Q『たった今光線種が確認された今A L弾頭に切り替えている。5分ほど待て。』

どうやら、どこかで光属種が確認されたためA L弾頭に変更しているようだ。

だがそうこうしているうちに1機が要撃級に真つ二つにされ撃墜された。

ホワイトファングは残り2機になってしまったようだ。生き残った唯一の仲間の雨宮少尉が叫ぶように唯依に話しかけた。

雨『唯依！支援砲撃はまだなの？』

唯『どうやら光線種が確認されたためA L弾頭に切り替えるために支援砲撃が出来ないようだ。』

雨『そんな、このままじゃ私たちもやられてしまいます。』

唯『弱音を吐くな！我々は斯衛だろ！』

するとH Qから通信が入った。

H Q『H Qよりホワイトファング各機へ、ホワイトファング各機へたった今最優先事項が入電！』

唯『なんだ！』

H Q『まもなく太平洋上に展開している米軍艦隊からG弾発射が決

定、至急その場から退避せよ。』

雨『何！G弾って！米軍は何を考えているのよ！』

唯「考えるのは後だ！今は生き残る事だけを考えろ！」

雨『了解！』

そして、雨宮が機体を反転させたがそこに要撃級がモース硬度15を誇る腕を振り下ろしてきた。

唯「雨宮！」

だがそれに気づいた唯依は要撃級と雨宮の機体の間に自分の機体を割り込ませ雨宮を庇った。

しかし、無理矢理に割り込ませたため機体の両足を失ってしまった。

雨『唯依！大丈夫！？』

唯「私は大丈夫だ。それより早く逃げろこのままだと二人ともやられるぞ！」

雨『だけど！置いていけないよ。』

唯「命令だ！それに本州を取り戻すための生贄になるのなら私も本望だ。」

雨『聞けません！』

唯「その国連兵！コイツを連れて行ってやってくれ。」

国『わかった。』

唯依は近くを通りかかった国連仕様の不知火に雨宮を託した。

そして、周りを確認すると一匹の要撃級が唯依に向けて腕を振り下ろそうとしていた。

唯依はここまでだと思い目を閉じた。

しかし、いつまでたっても衝撃が来ないのを不思議に思っ唯依は目をあけるとそこには白と青の戦術機と真っ二つに両断された要撃級がいた。

Side Out

当麻Side

遊「ハロ、G弾発射までどのくらい時間がある？」

ハ「アト、10プン、アト、10プン！」

遊「十分だ、出来るだけ多くの人間の命を救うぞ！」

ハ「リヨウカイ！リヨウカイ！」

そして東京湾上空に到達すると光学迷彩を解き横浜へ飛翔した。

暫くして、横浜へ到達するとそこでは国連仕様の不知火がBETAに囲まれていた。

そして、そのうちの1機がBETAの真っ只中へ突っ込もうとして

いた。

それを見た俺は即座に急降下しその戦術機の元へ向かった。

遊「何をやっている！死ぬ気か！？」

？『誰だお前！』

あの不知火のマークってまさか。

遊「こういうときは自分から言うもんじゃないか？」

？『俺はA－01連隊所属鳴海孝之少尉だ。』

やっぱA－01の鳴海孝之だったよ。もしかして、これで鳴海死亡イベントへし折っちゃたよ。ま、いいか。

孝『こっちは所属を言ったぞ。お前は誰だ！』

やべ、どうにかしてごまかさないと。

遊「そんなことより、お前生き残る気はあるのか？」

孝『え？』

遊「さっきお前BETAの大群に突っ込もうとしただろ。

お前の帰りを待っている人がいるかもしれないんだから自分の命を粗末にするな！それじゃあな、また互いに生き残ったら何処か出会おう」

他のA－01のメンバーが到着したのを確認すると俺はダブルオー

を飛翔させた。その後すぐ光線級から狙われたが、俺はそれを全てかわし、

ビームを打ち込み光線級を殲滅したあと更に奥へと進んだ。

そのとき通信から『レーザーを避けた！』とか聞こえてきたが無視して俺はそのまま進んだ。

光線種の攻撃がうざくなってきたから暫くの間噴射地表面滑走で進んでいると、レーダーが取り残された1機の瑞鶴を捕らえた。

遊「まだ生体反応がある。間に合え！」

そして、俺はスピードを上げ、GNソード？ロングで要撃級を真っ二つにした。

俺はGNソード？ロングで周りのBETAを殲滅するとその瑞鶴（山吹色）に通信をつなげた。

遊「その斯衛軍衛士大丈夫か？」

？『は、はい。大丈夫です。』

遊「ハッチは開くか？」

？『はい。』

そして、俺は手に乗せた斯衛軍衛士を見て驚いた。山吹色の瑞鶴だったためもしかしてと思ったが、まさか本当に篁唯依だったとは。俺はそのままダブルオーのハッチを開き、彼女をコックピットの中に入れた。

唯「ありがとうございます。私は日本帝国斯衛軍所属篁唯依少尉で

あります。あなたは？」

ここはごまかせないよな。

遊「俺は上条遊星だ。一応今のところどこにも所属していない。」

唯「え？それってどういうk「そんなことよりお客さんみたいだぜ。」へ？」

やべ目が点になってる唯依姫萌える。と、ふざけてる暇は無いよな、なんせ周りは要塞級が6体、要撃級が13体、突撃級が24体、重光線級が5体、小型種なんて数え切れないくらいいっぱいいた。さすがハイヴの近くだな腐るほどBETAがいるぜ。

唯「あの大丈夫なのですか？」

遊「え、すまん、すまん。かなり揺れるからちゃんと捕まってるよ。」

唯「捕まってるってどこにつて、キャア」

俺はダブルオーを飛翔させ重光線級の攻撃を避けながら重光線種をGNソード？ロングで殲滅させると

GNソード？ロングを腰へマウントさせ左肩にマウントされたGNバスターソードを装備し機体を回転させながら要塞級を真っ二つにしその中から出てきた光線級をレーザーを放つ前に踏み潰し、そのまま勢いを殺さず全ての要塞級を切り裂くもちろん要塞級から出てきた光線級はレーザーを放つ前に踏み潰した。

遊「よし、このまま離脱する。ハロ、最短コースを表示してくれ。」

ハ「リヨウカイ！リヨウカイ！」

そして俺は可能な限りのBETAを殲滅しながら最短コースで安全ラインまで到達するとすぐに横浜が紫の球体に包まれた。

遊「ふう、大丈夫かな？」

唯「はい、ですが、先ほど言っていた。所属が無いということとは？」

遊「ああ、その辺についても話したいからまず落ち着けるところまで案内してもらえる？」

唯「はい、なら此処へ。」

そして俺たちは唯依が教えてくれた場所へ向かった。

第一話新たな世界（後書き）

一応孝之さん、救ってみました。あと書いてないですが慎二さんも生きています。感想待っています。

第二話 陽との交渉（前書き）

今回は悠陽との会合です。（悠陽以外にも出ますけど。）

今日は純夏の誕生日ですね。私の住んでいる所は雨が降ってますよ。皆さんの住んでいる所は如何ですか？

第二話 陽との交渉

俺は唯依の案内である基地に着陸しようとしていた。するとオープンチャンネルで通信が来た。

CP『こちら日本帝国軍仙台基地だ所属不明機に告ぐ所属と目的を言え。』

遊「俺は上条遊星だ。見ての通り俺はどこにも所属していない。だが斯衛の衛士を1人保護したためそちらに引き渡したい。」

CP『ふざけるな、そんなにも特異な機体がどこにも所属していないわけが無いだろう。』

ま、普通そう答えるよな。でも、本当の事だしどう答えよう。すると1人の老人が通信に入ってきた。

？『その戦術機の衛士、本当にこちらの衛士を保護しておるのか？』

遊「あなたは？」

？『ワシは日本帝国斯衛軍紅蓮大将じゃ。』

すると、唯依の顔が引きつった。

唯『ぐ、紅蓮大将がなぜこのようなところに？』

えっと紅蓮って言うത്と五摂家の中の一家で冥夜の先生なんだっけ。

紅『どうやら本当のようじゃな。それは殿下が此度の作戦から生還した衛士を労いたいと仰ってなその護衛じゃ。』

それとこちらから迎えを出す。その者たちに引き渡してくれ。』

悠陽がいるなら丁度いいな。

遊「わかった。あと、できれば構わないがこの後殿下と話がしたい。もちろんあなたが一緒でも構いませんので。」

紅『それはなぜじゃ?』

遊「今後の俺の身の振り方を考えると何処かに所属したほうが良いと思ひまして。」

紅『なぜ我が帝国に?』

遊「それは俺が日本人だからだ。」

ちよつと無理があるかな?

紅『了解した。もし他に要望があるのなら聞くが?』

よかったこれで通らなかつたらまた別の理由を考えないといけなかったからな。

それに少し無理してあの人も呼んでもらうか。

遊「それなら香月夕呼博士を呼んでいただけますか?」

すると紅蓮大将の目がするどくなった。

紅『お主どこまで知っておる。』

遊「それについても後ほど。」

紅『承知した。あと香月博士にも護衛を付けさせるが良いか?』

俺の秘密はあまりたくさんの人には知られたくないが、香月先生の護衛なら口が堅いだろう。

遊「分かりました。それでは後ほど。」

紅『うむ。』

俺は通信を切るとダブルオーを基地の一角に着陸させた。

遊「ハロ、機体を頼む。」

ハ「リヨウカイ!リヨウカイ!」

そして機体をハロに任せ俺たちは機体から降りた。そして紅蓮大将が言っていたように迎えが来たためその人たちに唯依を任せ、俺は赤の斯衛がついて来いと言っていたのでその人たちについて行った。ちなみに俺はノーマルスーツを着ていたためずっと注目の的になっていた。

そして、基地内とは思えないような豪華な部屋で待っていると紅蓮

大將がやってきた。

紅「お主があゝの戦術機の衛士なのじゃな。」

遊「はい。そうです。上条遊星です。」

紅「そうか、それにしても変わった強化装備じゃな。」

遊「ええ、コレは強化装備とは違って宇宙空間でも使えるように考えている物ですから。」

紅「何！宇宙空間でもか。」

遊「ええ、そうです。ですが詳しい話はまた後ほど。」

紅「そうじゃな。もう少しで殿下がお見えになるだろうからしばし待たれよ。後、香月博士は国連軍基地から来るそうじゃから時間がかかるらしい。」

そして、暫くたつと悠陽がやってきた。

悠「そなたが私と話したいと申した方ですね。」

遊「はい。此度はご多忙の中、私の為に時間を割いていただき真にありがとうございます。」

悠「そんなにも固くならなくてもよろしいのですよ。」

遊「そうでしょか？」

悠「ええ、私の知り合いにも誰とでも分け隔てなく接する方がおりますので。そなたにもその者と同じ匂いがします。」

すると、後ろの扉から2人の人間がやってきた。

？「やったじゃない。白銀、どうやらあんたと同じような人間が現れたらしいわよ。」

？「えー、先生、それは酷いですよー」

え、なんでこの時期にアイツが？

紅「香月博士、白銀中尉、お早いお越しで。」

夕「そりゃあ、誰も見たこと無い戦術機の衛士が私に話がしたいって言うんだもの飛ばしてきたわ。」

武「先生が運転する車に乗るのは2回目だけど2度と乗りたくないね。」

夕「で、そこで呆けてるのが私に話しがしたいっていう物好きね。」

遊「あ、ああ、上条遊星です。」

夕「私を呼び出したって事は私のことは知っているとおもうけど一応自己紹介しておくわね、香月夕呼よ。よろしく。」

武「白銀武だ階級は中尉だ。よろしく頼む。」

そして俺は先生と武と握手をした。

だがなぜこの時期に武が先生と一緒にいるんだ？もしかして、友達から聞いて少し読んだSSと同じでここにいる人物全てループの記憶があるのか？

一か八か試してみるか。

遊「白銀、いきなりで悪いがお前は这个世界何回目だ？」

するとここにいる全員の顔が驚愕に変わった。

夕「それを聞くて事はあんたはいったい何者なの？」

先生は俺に銃を向けながらにらんできた。どうやら武から銃の構え方とセーフティーのはずし方は学んだらしい。

遊「簡単に言う俺は白銀と同じ存在だ。」

俺が両手を挙げながらそう言う先生は銃を下ろしてくれた。そして次は悠陽が話しかけてきた。

悠「因果導体と言う物でしょうか？」

遊「どうやらここにいる人間は全てループについて知っているみたいだな。そして、武以外の人間にも前の世界の記憶があると考えても良いか？」

夕「そうよ、ただ私は2回目、殿下は記憶の流出、白銀は3回目、紅蓮大将はこの事実を知っているということよ。あともう2人いるわ。」

1人は多分霞だろう、もう1人は誰だ？

遊「そうか。で、さっきの殿下の質問に答えると、細かく見ると違う。白銀は人の意思でこっちに連れてこられたが、俺は世界の意思でこっちに連れてこられた。」

武「なぜそう思うんだ？」

遊「それはな、…」

そして俺は神との間に何があったのかを話した。もちろん霞にリーディングされても言いように脳量子波で上手くごまかしながらいろいろと嘘を混ぜて。

夕「それで、あの戦術機はあんたの世界の技術力なの？」

遊「違う、アレはまた別の平行世界の技術だ。」

夕「それじゃ、なぜあんたが扱えるの。」

遊「さっき言った世界の意思に頼んで扱えるようにしてもらった。」

悠「そうですか、では、いきなりで悪いですが私たちと共に戦ってもらえますか？」

遊「いいですよ。しかし条件があります。」

紅「なんじゃ？」

遊「俺に一個小隊を預けて欲しい。そして国連軍とも常に行き来できるようにして欲しい。」

悠「それはなぜですか？」

遊「あの機体、ダブルオーと言うんだがあいつのPCの中にはいくつかこの世界でも使えるような物があつたからその試験小隊として欲しい。」

それと、例の計画についても協力したいから常に行き来できるような状況にして欲しいんだ。」

悠「分かりました。ではその条件を飲みましょう。」

遊「ありがとうございます。」

そして、暫く今後について相談すると今、武は帝国斯衛軍の白で階級は中尉だそうだ。

今は先生の下に出向扱いとしてヴァルキリーズとは別に単機で明星作戦にも参加していたらしい。

どれだけチートなんだよこの世界の武は。

後、武がループしてきたのはBETAが横浜ハイヴを建設した直後に第二帝都城にループしたらしい。

その時に悠陽が武を保護しその時記憶が流れてきたらしい。

先生はオルタネイティブ4の責任者に命じられたときぐらいにループしてきたそうだ。

00ユニットの素体である純夏は今が多分脳だけの姿で横浜ハイヴの中にポッドの中に生きてると推測されている。

そして俺の待遇は帝国斯衛軍の山吹の中尉となった。

いきなり現れた人間が山吹を着るとなると不振におもわれるので、お家断絶していた上条家だが、実際は殿下から極秘裏に戦術機開発の命を受けていた祖父と父の遺言でこの機体とデータを殿下に届けに来た。

また、命を受けたときには母は死亡していて、俺は赤子で、祖父と父は戦死扱い俺は殿下に会うまで自分の出生の秘密は明かされなかった

という出鱈目も同時に考えた。ちなみに実際に上条家は山吹を着る事を許された武家であったことからこういう風になった。

さて、これからどうやって原作ブレイクをしようかな？

第二話 陽との交渉（後書き）

遊星「さてと、作者どうしてこんなに更新が遅れたんだ？」

えっと話自体はできてたんだけど、ちょっとしたミスで全データが消えたので書き直すのに時間がかかりました。すみません。

遊星「ちゃんと管理しておけよ。」

はい、仰るとおりです。では今回の謝辞を黒棺先生、ラーズグリーズ先生

感想を書いていただきありがとうございます。今後も応援よろしく
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1318u/>

MUV-LUV ALTERNATIVE チートな転生者

2011年7月8日03時19分発行